



パレスチナ支援



ウクライナ支援



南スーダン難民支援



東ティモール支援



認定NPO法人

地球のステージ

いのちをつなぐ・未来をつくる
すべての人が輝く社会をめざして

2025 年度年次報告書によせて

平素より地球のステージの活動を応援してくださり、誠にありがとうございます。

この1年を振り返って思うことは、「心理社会的支援」という専門性がさらに強化されたということでしょう。今や「心のケア」の代表的手法である心理社会的支援は、日本国内でこそあまり知られていませんが、世界では標準です。その専門性がガザ、ウクライナで展開され、非常に高い評価を受けてきました。

現在ウクライナは JPF の資金で、ガザは JICA の資金で UN Women と共に活動しています。どちらも厳しい戦争のトラウマに曝された人々を支援対象としていますが、現地は人材が育ち、非常によいサイクルで事業が展開しています。ウガンダでは、北部地域に避難する南スーダン難民と地域コミュニティに対して心理社会的支援を行い、2 年半、心の健康に寄与し、終了となりました。

東ティモールでの活動は今年で 26 年目、団体として最長の活動期間を持つ国です。こちらは母子保健、特に超音波診断（エコー）を用いた検査技術の移転を中心に活動してきました。その活動は現地でも高く評価され、当団体の専門性の一つになっています。

国内事業としての「地球のステージ」公演は、コロナ禍によって激減し、回復の兆しが見えません。教科学習時間の確保、行事やその予算の削減、いろいろなことが影響しています。一方、ロータリークラブやライオンズクラブなどの社会奉仕団体からの依頼が少しずつ増え、その流れで学校公演につながったりもしています。あきらめないことが大切だと思っています。

現在、本部に 4 人、東ティモールに 2 人、計 6 人の日本人スタッフと 20 名ほどの現地スタッフがこれらの活動を支えています。規模は小さいかもしれませんが、それぞれに専門性を有し、事業予算獲得、継続に際して力を発揮しています。

神奈川県海老名市に本部事務所を転居して 10 年が過ぎました。加えて「地球のステージ」公演が始まって、今年は 30 周年でもあります。首都圏に在していることで人脈が広がり、羽田空港を拠点に様々な活動を展開することでも利便性も得ています。SNS の展開や会員の獲得を含めた広報、拡張性にはまだまだ課題も多い現状も見えてきています。

これからもスタッフ間のコミュニケーションを活発化し、風通しのよい団体として、3 つの国での活動の展開と維持、国内事業の充実を図っていく必要があると感じています。

世界への興味関心を持ちながら、末長いご支援をこれからもよろしくお願い申し上げます。

2026 年 6 月

代表理事 桑山紀彦



地球のステージ

地球のステージ団体ロゴ
公演タイトルとしても使用

Frontline

for a peaceful & healthy world

国際協力の現場では
Frontline（フロンタライン）
という名称で活動しています

表紙写真

- （左上）心のケアに参加する子どもたちと（パレスチナ支援）
- （右上）最終発表会でのグループ発表（ウクライナ支援）
- （左下）養成したファシリテーターによる地域での心のケア（南スーダン難民支援）
- （右下）超音波検査（エコー）の使い方を学ぶ（東ティモール支援）

もくじ

p2 ごあいさつ

p3 団体概要

p4 東ティモール支援事業

p6 ウクライナ支援事業

p8 パレスチナ支援事業

p10 南スーダン難民支援事業

p12 地球のステージ公演事業

p14 国内災害復興支援事業

p15 会計報告

OUR VISION

誰もが、自分の人生の
主人公として生きることができる

地球のステージがめざすのは、支援する側・される側という関係を越え、
一人ひとりが自分の力と意思を信じ、自分らしく未来を選び取れる社会です

VISION を支える 4つの姿勢

● 個人の自己実現を大切に

国や集団ではなく、顔と名前のある一人に向き合い、
その人の夢や願いを共に考える

● 見て見ぬふりをしない

心に芽生えた「なんとかしたい」という思いに正直であり、
自ら一步を踏み出す

● 「助ける」ではなく「支え合う」

上下ではなく同じ目線のパートナーとして関わり、
互いに力を与え合う関係を築く

● 一人ひとりの生き様を受け止める

正しさを決めつけず、まず耳を傾ける
違いを知り、対話から共にできることを探す

OUR MISSION

目の前にいる人と関わり、
人を支える

活動地

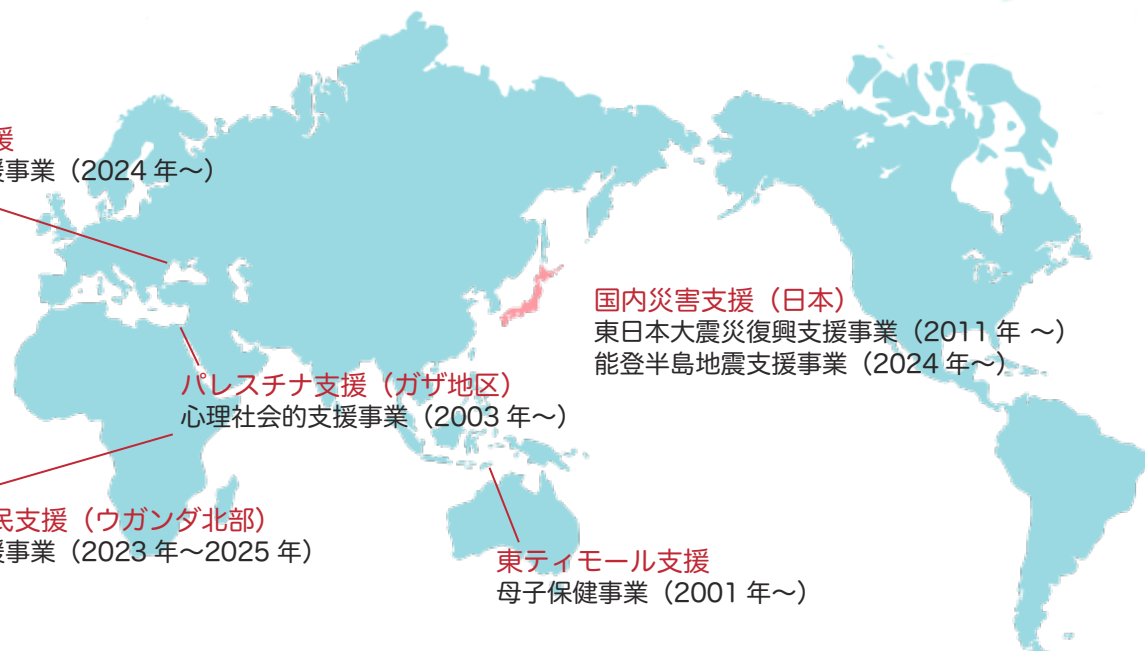
ウクライナ支援
心理社会的支援事業（2024年～）

パレスチナ支援（ガザ地区）
心理社会的支援事業（2003年～）

南スーダン難民支援（ウガンダ北部）
心理社会的支援事業（2023年～2025年）

国内災害支援（日本）
東日本大震災復興支援事業（2011年～）
能登半島地震支援事業（2024年～）

東ティモール支援
母子保健事業（2001年～）



母子の命を守るために

— 地域とともに進める 母子保健の質向上 —



母親学級で栄養について説明する現地助産師

❖ 事業背景 ❖

東ティモールのボボナロ県では、医療施設へのアクセスの悪さや、妊婦健診をはじめとする母子保健サービスの質が十分でないことなどを背景に、妊産婦や新生児の死亡が他県よりも多く発生しています。特に、妊娠・出産時のリスクを早期に発見し、適切な医療につなげるためには、医療者がハイリスク妊娠に適切に対応できる能力を身につけるとともに、妊産婦が安心して母子保健サービスを利用できる環境を整えることが重要です。そこで本事業では、医療者の能力強化と医療施設の環境整備の両面から母子保健サービスの改善に取り組み、予防可能な妊産婦死亡および新生児死亡の削減をめざしています。

❖ プロジェクト概要 ❖

活動目的・目標

保健センターにおける母子保健病棟の建設、医療者への研修、母親学級や妊婦健診のモニタリング・評価、地域住民への母子保健啓発活動などを通して、妊産婦の環境が向上し、妊産婦および新生児の死亡削減をめざす

活動地

東ティモール ボボナロ県マリアナ市、ボボナロ郡

対象者

ボボナロ県医療者、ボボナロ県保健局職員、保健省および国立保健機関、対象地妊産婦とその家族、地域住民など



巡回診療の様子

❖ 事業成果 ❖

2025 年度の事業では、医療者の能力強化、地域住民への啓発、母子保健サービスを提供する施設の整備を柱として活動を実施しました。

母子保健サービスの質の向上に向け、県内の助産師 12 名を対象に母親学級運営研修を実施したほか、診療所や保健センターで行われる母親学級のモニタリング・評価を継続しました。また、医療者 22 名を対象に医療コミュニケーション研修を実施し、妊産婦との関わり方について学ぶ機会を設けました。さらに、医療者 25 名を対象に妊婦健診・産後健診ガイドラインの導入研修を 3 日間にわたり実施し、妊娠から産後まで適切なケアを提供するための能力強化を進めました。

地域では、母子保健サービスの利用を促すため、複数の村・集落で啓発活動を実施しました。アタバエ村では 80 名、ファトゥク・ラン集落では 42 名、



活動中に地域住民にインタビューする
フィールド・オフィサー

サニリン村では 55 名、レボス集落では 85 名、ライヘウ村では 70 名が参加し、妊産婦やその家族、地域住民が母子保健への理解を深める機会となりました。

施設整備では、ロルバ保健センターの母子保健病棟建設を 2025 年 4 月に着工しました。保健省のエンジニアとも連携しながら定期的にモニタリングを行い、2026 年 3 月、母子保健病棟は完成しました。新しい病棟では、妊婦健診や産後健診、出産、家族計画といった母子保健サービスの提供が開始されています。

また、県内 4 郡の地域住民 301 名への受診状況調査、12 ケ所の医療施設および医療者 21 名への調査を実施し、母子保健サービスの現状や課題を把握しました。さらに、母子保健病棟建設が地域住民の受診行動に与える影響についても調査し、今後の事業評価につながる情報を収集しました。

行政との連携では、保健省と基本合意書、国立保健院と技術協力協定を締結しました。保健省とは母親学級ガイドラインについて継続的に協議し、ボボナロ県保健局とは四半期会議や年間評価会議を実施しました。これらの取り組みを通じて、医療者の能力向上、住民の理解促進、施設整備を進めるとともに関係機関と連携して母子保健サービスを改善していくための基盤を整えました。



完成した母子保健病棟



日本人専門家による
コミュニケーション研修

◆ 今後の計画 ◆

次年度は医療環境の整備と医療者の能力強化、地域住民への啓発を進めます。電力供給が不安定な医療施設 4 ケ所へのソーラー発電設備の設置、6 回のコミュニティ啓発イベント、僻地 8 ケ所での母親学級を実施します。また、産婦人科エコートレーニングと技術認定、妊婦健診・産後健診のワークショップ、助産師のスキルアップ研修、医療コミュニケーションセミナーを行います。さらに、母親学級ガイドラインの策定、エンドライン調査や県保健局との評価会議を実施し、事業成果を踏まえた保健省への政策提言につなげていきます。

Bondia husi Merkadu Mariana ! (マリアナ市場から、みなさんおはようございます！)

「マナ 理恵（りえちゃん）、ほしいものがあるなら 6 時には起きて市場に行かないと買えないわよ」。

10 時過ぎに市場からぐったりして帰った私に、ゲストハウスのスタッフ、ロスシッタさんが声をかけてくれました。この日は焼き立てパンを買いに行ったものの、すでに売り切れ。土曜日のマリアナ市場では、早起きが何より重要です。

ボボナロ県各地から商人が集まる土曜日の市場には、新鮮なフルーツや野菜、肉などが並び、いつも以上の活気に包まれます。質の良いものは 10 時過ぎにはなくなるため、市場はまさに早い者勝ち。スーパーもありますが、野菜は地元の市場で買う方が新鮮でおいしく、私にとって大切な「生命線」です。

さらに、市場はテトゥン語を学ぶ絶好の場所でもあります。「何がほしいの?」「こっちにも新鮮なのがあるよ!」と声をかけてくれる市場のお姉さんたちとのやり取りを通して、スタッフから教わった野菜の名前やフレーズを実践しています。威勢のいいお姉さんたちに揉まれながら、お目当ての野菜を探すのも楽しいひと時です。

最近、現地スタッフのマリアーナさんから、実家でよく作る料理も教えてもらいました。主役は、大豆を発酵させた「テンペ」。手頃な価格で購入でき、炒め物や揚げ物としてよく食べられています。

〈アラウジョ家のレシピ〉

材料は、トマト（小 3 つ）、テンペ（1 つ）、唐辛子（2 つ）、ピーナッツ、煮干し、炒め油。まず煮干しを水で戻します。フライパンに油をひいてトマトを炒め、水分が出てきたら輪切りにした唐辛子を加えます。最後に、水で戻した煮干し、テンペ、ピーナッツを加えて炒めれば完成です！

赴任当初は自炊ができるか心配でしたが、地元の方々やスタッフに助けられながら、今では料理を楽しんでいます。現地にある食材で、いかにおいしいものを作るか——私の探求はまだ続きます！



戦争の中で、心に寄り添い続ける

— ウクライナ・オデーサでの 心理社会的支援 —



最終発表会で、来場者に制作したジオラマの解説をする子どもたち

❖ 事業背景 ❖

2022年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻は長期化し、多くの市民が家族を失った悲しみや故郷を追われた喪失感、いつ攻撃が起こるかわからない恐怖など、深刻なストレスや心の傷を抱えながら生活しています。

事業地であるオデーサ州には、東部の激戦地から多くの国内避難民が避難しています。一方で、PTSD（心的外傷後ストレス障がい）や戦争によるトラウマに対応できる精神科医療機関や専門的な支援は十分ではありません。また、オデーサ市自体も度重なる攻撃を受けており、2025年冬以降はインフラへの攻撃による長時間の停電や公共交通機関の運休、学校の時間割変更など、市民の日常生活にも大きな影響が及んでいます。

こうした状況を受け、地球のステージではオデーサ市の子どもや成人などの戦争被災者を対象に、心理社会的支援（PSS）ワークショップを実施しています。被災者が自らの思いや感情を表現し、心の回復につなげることを目指すとともに、現地で継続的なトラウマ・ケアを行える人材を増やすため、PSSファシリテーターの育成やソーシャルワーカー、教師への研修にも取り組んでいます。



破壊された風景とともに
日々の暮らしがある

❖ プロジェクト概要 ❖

活動目的・目標

- ・戦争によるトラウマやストレスを抱えるオデーサ市の戦争被災者に PSS を提供し、精神保健の改善と生活の質の向上を図る
- ・PSS ファシリテーターの育成や、ソーシャルワーカー・教師を対象としたトラウマ・ケア研修を通じて、地域で継続的に心のケアを提供できる体制を強化する

活動地

ウクライナ オデーサ州オデーサ市

対象者

オデーサ市に暮らす子ども、ユース、成人などの戦争被災者、特に東部の戦闘地域から避難してきた国内避難民。また、戦争被災者への支援に携わるソーシャルワーカーや教師、PSS ファシリテーター候補者



サマーキャンプ
不安から離れて、楽しむ時間を

❖ 事業成果 ❖

2025年9月末までのフェーズ1では、子どもと成人を対象とした PSS ワークショップを継続して実施しました。子どもたちは写真や絵、粘土、ジオラマ、映画づくりなど、さまざまな方法で自分の気持ちや経験を表現しました。また、

サマーキャンプや最終発表会を開催し、仲間と交流しながら安心して過ごせる機会もつくりました。

ワークショップ参加者への事前・事後アンケートを専門家が分析した結果、参加者の心の状態の改善に本事業が役立ったことが統計学的にも確認されました。特に子どもでは、「自分は役に立っていないと感じる」「常に緊張している」といった項目に有意な改善が見られました。成人についても心の状態の改善が確認された一方、抑うつ感や自己肯定感など、より深い心の傷には継続的な支援が必要であることも明らかになりました。

さらに、現地で支援を継続できる体制づくりにも力を入れ、フェーズ 1 では 5 名の PSS ファシリテーターを養成するとともに、ソーシャルワーカーへのトラウマ・ケア啓発セミナーを実施しました。

2025 年 11 月からのフェーズ 2 では、これまでの子ども・成人クラスに、新たにユース世代を加えて PSS ワークショップを実施しています。また、新たな PSS ファシリテーター候補 4 名が養成講座を受講し、ワークショップにボランティアとして参加しながら実践経験を積んでいます。さらに、ソーシャルワーカーや教師を対象としたトラウマ・ケア講座を継続的に開催し、地域全体で戦争被災者の心を支える力を高めることをめざしています。



成人クラスでのジオラマ制作
理想の街を作り出す



ルーマニア・ガラツィでの日本人専門家による
PSS ファシリテーター養成研修

❖ 今後の計画 ❖

2026 年度も、子ども・ユース・成人を対象とした PSS ワークショップや、ソーシャルワーカー・教師向けのトラウマ・ケア講座を継続します。日本人専門家によるオンラインでのモニタリングや現地指導を行うほか、サマーキャンプや最終発表会を実施し、参加者の心の回復と現地で支援を担う人材の育成を進めます。

ウクライナのひまわり

ウクライナの大地に広がるひまわり畑の風景は、写真で見ただけでも心に残ります。青い空の下、一面に咲く黄色い花は、ウクライナの自然の豊かさをやさしく伝えてくれます。ひまわりは人々にとって身近な存在であり、文化的にも経済的にも大切にされてきました。

ウクライナは世界有数のひまわり生産国です。国土の多くを覆う肥沃な黒土「チェルノーゼム」は栽培に適しており、夏になると中部から南部にかけて、見渡す限りのひまわり畑が広がります。収穫された種は主に食用油として使われ、ひまわり油は揚げ物やサラダなど、さまざまな料理に利用されています。また、ひまわりの種そのものも、身近なおやつとして親しまれています。

ひまわりには興味深い特徴もあります。大きな一輪の花に見えますが、実は小さな花がたくさん集まった「集合花」です。中心に規則正しく並ぶ種には数学的な法則も見られるといわれ、自然の美しさと思議を感じさせます。また、チェルノブイリ原発事故の後には、土壌の有害物質を吸収する性質を活かして植えられたこともあり、環境を回復させる取り組みの中でも役割を果たしてきました。

そして近年、ひまわりは平和や希望の象徴としても知られるようになりました。2022 年のロシア侵攻初期、ひとりのウクライナ人女性が武装したロシア兵にひまわりの種を渡そうとしたエピソードが世界に広まり、抵抗や平和への願いを象徴する花となりました。

映画「ひまわり」にも、旧ソ連時代のウクライナのひまわり畑が映し出されています。時代が変わっても、ひまわりはこの土地に咲き、人々の暮らしを支え、心に寄り添ってきました。黄色い花が風に揺れる美しい風景を、誰もが安心して眺められる平和な日々が、一日も早くウクライナに戻ることを願います。



心に寄り添い、地域につなげる

— ガザで続ける心理社会的支援 —



「忘れられないあの日」を描き、
みんなで輪になって共有する少年たち

❖ 事業背景 ❖

2023 年 10 月以降、ガザ地区ではイスラエルによる大規模な攻撃と地上侵攻が続き、多くの市民が死傷し、住む場所を追われてきました。空爆や地上戦による街の破壊、家族や知人との死別、度重なる避難に加え、食糧や生活物資の不足、病気や飢餓への不安など、人々は長期間にわたり極度の緊張とストレスにさらされています。特に子どもたちは、成長過程でこうした体験を重ねることで、心的外傷後ストレス障がい（PTSD）など深刻な精神的問題を抱えるリスクが高まっています。

活動地のハンユニス市でも戦況の悪化に伴い避難対象地域が広がり、活動場所へのアクセスが困難になるなど、支援活動そのものが大きな影響を受けました。また、食糧を含む物資の搬入が長期間制限され、飢餓への恐怖も人々の大きな心理的負担となりました。こうした状況の中、子どもたちが安心できる時間を持ち、生きる力を取り戻すための継続的な心のケアが必要とされています。



多くの建物が破壊されたため、
避難地区のテント内で活動を行っている

❖ プロジェクト概要 ❖

活動目的・目標

- ・ 子どもたちへの心理的応急処置（PFA）、心理社会的支援（PSS）を提供して安心できる場所を作り、自身の体験を語ったり表現したりすることで PTSD の発症を予防する
- ・ 参加する子どもたちの母親に PSS の意義を伝え、実際に体験してもらうことで、母親の不安を軽減し、家庭での心のケアを促進できるようにする
- ・ 教師や福祉職など子どもたちに接することが多い専門職種を持つ人たちに PFA、PSS の知識やノウハウを伝え、様々な場面で PSS が活用されるよう裾野を広げていく

活動地

パレスチナ自治区ガザ ハンユニス市、デイル・アル・バラ市

対象者

ハンユニス市に暮らす 8～15 歳の子どもたちとその家族（主に母親）、子どもと関わる人が多い専門職種を持つ人たち（教師、福祉職、カウンセラーなど）



みんなで身体を動かしリフレッシュ
安心できる場を作っていく

❖ 事業成果 ❖

PFA・PSS では、戦況に応じて活動場所をハンユニス市からデイル・アル・バラ市にも拡大し、国連（UNRWA や UNICEF など）と連携しながら活動を継続しました。ワークショップでは、踊りや競争、遊びなどを取り入れることで、

緊張していた子どもたちの表情が次第に和らぎ、多くの笑顔が見られました。また、自らのつらい体験について少しずつ話せるようになる子どももあり、精神的な安心や安定につながっています。さらに、PFA・PSSに参加する子どものうち、親がいない、あるいは保護者が就労できないなど、特に脆弱な400世帯に野菜を中心とした食糧を配布しました。

9月以降のJICA、UN Womenとの事業では、子ども300名にPSSワークショップを実施するとともに、その家族300名を対象にPSSの情報提供セミナーを行いました。さらに、教職や福祉職など50名の専門職にPSSの知識と実践方法を伝え、それぞれの現場でPSSの知識を生かせるよう育成しました。これにより、子どもへの直接的な心のケアに加え、家庭や地域、専門職を通じてPSSの知識を広げていく基盤づくりを進めています。

現在も物資不足や攻撃、厳しい避難生活など、活動を取り巻く環境は不安定です。そのような状況だからこそ、子どもたちが安心して笑い、自分の気持ちを表現できる時間をつくること、そしてその心を支える人を地域の中に増やしていくことが重要です。直接的な支援と人材育成の両面から、ガザの人々が心の安定を取り戻すための支援を継続しています。

❖ 今後の計画 ❖

子どもへのPSSワークショップを実施し、安心できる環境の中で自身の体験や感情を表現する機会を提供します。また、家族へのPSS情報提供、教師・福祉職などへのPSS研修を行い、家庭や地域で子どもを支える力を高めます。さらに、関係機関との連携や専門家による指導・効果測定を通じ、PTSDが疑われる子どもを適切な支援につなぐ体制を整えるとともに、地域に根差した継続的なPSSの仕組みづくりを進めます。



母親へのPSS情報提供セミナー
語り、共有することで心の負担を減らしていく



専門職種をもつ人たちに
PSSのノウハウを伝え、裾野を広げる

モハammad・マンスールを偲んで

モハammadと出会ったのは今から15年前、彼が14歳のときでした。2週間に及ぶイスラエルからの激しい攻撃から7ヶ月、子どもたちを対象にした心のケアに参加したひとりでした。

「忘れられないあの日を絵に描こう」そう提案すると、色えんぴつは使わずに黒えんぴつだけで街が空爆されている様子をモハammadは描きました。「空爆されて、自由のない僕たちの街に色なんてない」まっすぐに放つ言葉に、正義感の強さを感じました。

その後、ジャーナリストを志して大学で勉強するも、ガザ地区の中で職業とするのは難しく、モハammadは地球のステージの現地スタッフとして、心のケアの活動を手伝うようになります。映像制作が得意な彼は、映画制作ワークショップや広報ビデオの制作の中心人物でした。2023年3月、それまでの心のケア活動は終了しました。しかし、同年10月、再びガザに戦禍が訪れ支援活動を始める中、モハammadはプロジェクト・コーディネーターとして現地スタッフをまとめ、地域の行政組織や国連などとの調整業務を積極的に担ってきました。一方、朝日新聞の現地通信員として取材を行い、人々の心に寄り添った記事を書き、日本や世界に向けて現地の様子を伝え続けました。ジャーナリストとしての夢が叶った日々でもありました。

2025年3月24日、モハammadはドローンからのミサイル攻撃により、命を落としました。享年29歳。早すぎる死に、私たちは言葉を失い、胸を痛めました。

モハammadがガザから送ってくれたたくさんの写真。彼亡き後も多くの方にご覧いただきたいと思い、写真パネルにしました。2025年6月14日、モハammadを偲ぶ会とともにパネル展を開催、その後は市役所やショッピングモールなどで展示してきました。現在は遠方への郵送、貸出しも可能です。



心のケアを地域の力に

— 難民、ホストコミュニティと 歩んだ2年間 —



地域で展開される PSS ワークショップ

❖ 事業背景 ❖

ウガンダ北部には、紛争等の影響により南スーダンから多くの人々が避難し、長期にわたる避難生活を送っています。また、難民を受け入れる地域の住民も、貧困や家庭内暴力などさまざまな困難を抱えています。こうした環境では、子どもから大人まで心理的な負担を抱えることが多く、心の健康を守るための継続的な支援が必要です。本事業では、南スーダン難民とホストコミュニティの双方を対象に、地域に根差した心理社会的支援（PSS）の仕組みづくりに取り組みました。

❖ プロジェクト概要 ❖

活動目的・目標

- ・心理社会的支援の拠点を整備し、子どもから大人にわたる広い年齢層に PSS ワークショップを提供し、PTSD の発症を予防する
- ・PSS ワークショップファシリテーター、PSS を理解し地域での展開を支える PSOP（Psychosocial support oriented person）を育成することで、事業終了後も地域の人々自身が活動を継続できる支援モデルの構築をめざす

活動地

ウガンダ北部ユンベ県、ビディビディ難民居住区

対象者

ビディビディ難民居住区に暮らす子どもたち、地域に暮らす PSS の担い手とワークショップを受ける人たち

❖ 事業成果 ❖

本事業では、PSS を地域に定着させるため、人材育成、PSS の実践、活動拠点の整備、行政・関係機関との連携を進めました。

人材育成では、2年間で PSS ファシリテーター 21 名、PSS を理解し地域での展開を支える PSOP 31 名を育成しました。2025 年度にはファシリテーター 15 名が平均出席率 98% で研修を修了しました。育成された人材は 6 つのコミュニティで PSS ワークショップを実施し、さらに 5 名のファシリテーターが研修やワークショップにアシスタントとして参加するなど、支援を受ける側から地域で PSS を実践・展開する担い手へと成長しました。

地域では、子どもを支える家族や地域住民を対象に、大人向け PSS を 4 地域で計 28 セッション実施しました。参加者が学んだ内容を地域に持ち帰り、自宅や学校、コミュニティセンターなどで自主的な PSS 活動始める動きも



1本の針金に人生を投影する
針金の人生ワークショップ



地域の学校で展開される音楽ワークショップ
養成されたファシリテーターが開催

生まれました。また、専門家による音楽ワークショップを導入し、音楽を活用して心のケアを行う手法を現地人材に伝えました。この活動は事業終了後も地域で継続されています。

PSS の理解促進と関係機関との連携強化にも取り組み、2025 年 5 月には 131 名が参加する PSS シンポジウムを開催しました。6 月の事業修了記念式には 148 名が参加し、行政、関係機関、コミュニティの関係者が、事業終了後も PSS に取り組んでいく意思を表明しました。

活動拠点については、小学校 1 校に多目的 PSS センターを新たに設置し、既存センターと合わせた 2 カ所を地域の PSS 活動拠点として活用しました。センターは他団体にも利用されるなど、地域に開かれた支援の場となりました。事業終了に向けて 2 つのセンターをウガンダ首相府（OPM）へ譲渡し、継続的な活用に関する覚書を締結しました。

本事業は 2 年間の活動を経て、2025 年 8 月 9 日に終了しました。事業終了にあたっては、施設を整備するだけでなく、PSS を実践できる地域人材を育成し、活動拠点を現地行政へ引き継ぐことで、地域主体で活動を継続できる体制づくりを進めました。2 年間の取り組みを通じて、政府・関係機関・コミュニティが連携し、南スーダン難民とホストコミュニティの双方を支える PSS を継続していくための基盤を構築しました。



養成した人材、地域行政スタッフなどを集めて、シンポジウムを開催



子どもたちの健やかな成長を願って

二度の避難を経験したリチャードさん ——トラウマと共に生きる

リチャード・タブさんは、南スーダン出身の 33 歳。幼い頃は穏やかな生活を送っていましたが、戦争が身近に迫り、13 歳の時、両親とともにウガンダへ避難しました。しかし高校生になると、故郷・南スーダンへの思いが募り、両親の反対を押し切って、叔父の暮らす南スーダンへ一人で戻ることを決めます。

そこで目にしたのは、想像をはるかに超える戦争の現実でした。ある町で軍に包囲され、2日間、息を潜めながら死の恐怖に耐えました。ようやく町を脱出した時、道の両側には多くの遺体が横たわっていました。「この国にいれば命はない」。叔父と話し合ったリチャードさんは、再びウガンダへ逃れ、二度目の難民となりました。

その後、教師をめざしましたが、経済的な理由から資格取得を断念。それでも「子どもに関わりたい」という思いを手放さず、子どもたちと遊びながら心をほぐす「アニメーター」の資格を取得し、国際 NGO で働くようになりました。戦争、避難、夢を諦めざるを得なかった経験。自らの人生を「トラウマの連続」と振り返る一方、リチャードさんが大切にしてきたのは、人生を自分で選ぶことでした。故郷へ戻ったことも自分自身の決断。「どんな困難があっても、自分の意志で決めたことには後悔がない」と語ります。

地球のステージのファシリテーター養成講座では、音楽を使った PSS を体験しました。辛い記憶を歌詞にし、仲間と何度も声を合わせて歌ううちに、過去を忘れようとするのではなく、その記憶や感情と共に生きていってもいいのだと感じました。そして湧き上がってきたのは、トラウマと共に歩んでいく決意と、それを支える勇気でした。自らが得たこの力を、今度は多くの子どもたちに届けたい。二度の避難と深い心の傷を経験したリチャードさんは、自分自身の経験を、誰かを支える力へと変えようと、今では自ら子どもたちを集め、自作の曲を使って音楽ワークショップを行っています。歌うことで仲間意識が生まれ、つながりあうことで、たがいに支え合いながら今を生きています。



（上）スタッフとの曲作り
（下）リチャードの音楽ワークショップ
いずれも左端がリチャード

世界とつながり、 平和と命の大切さを考える

— 地球のステージ公演 —



公演風景（島根県立浜田商業高等学校）

❖ 事業背景 ❖

「地球のステージ」は、1996年1月の開始以来、世界各地で起きている出来事や、そこに生きる人々の姿を、映像・音楽・語りを通して伝えてきました。学校現場を中心に、国際理解、平和学習、人権教育、命の大切さ、持続可能な開発目標（SDGs）など、多様なテーマを取り上げ、世界の出来事を身近なこととして考える機会を提供しています。

近年は、授業時間の確保や夏の暑さの厳しさ、予算の縮小などから、学校行事や催し物の実施が難しくなる傾向にあります。一方、一般の方を対象とした行政や団体等の主催による企画も増えています。従来のコンサートステージ公演に加え、短時間・低予算でも実施しやすいお話のみの講演形式を取り入れるなど、現場の状況に応じた活動を進めています。

❖ プロジェクト概要 ❖

活動目的・目標

- ・ 世界各地で起きている出来事や、そこに生きる人々の姿を、映像・音楽・語りを通してわかりやすく伝え、世界の出来事を身近な問題として考える機会を提供する
- ・ 国際理解、平和、人権、命の大切さ、SDGsなどをテーマに、一人ひとりが自分自身や社会とのつながりについて考えるきっかけを作る
- ・ 紛争や災害、心のケアなど、実際の支援活動や現地での経験を伝えることで、ニュースだけでは知ることのできない人々の暮らしや思いへの理解を深める
- ・ 公演後の質疑応答や交流会を通して、参加者が感じたことや疑問を共有し、相互にやりとりできる場を作る



ガザ紛争とモハammad篇
（大和市、海老名市、綾瀬市、座間市共催）

❖ 事業成果 ❖

年間の「地球のステージ」公演は51回、講演は8回、合計59回を実施しました。コロナやインフルエンザの影響による直前キャンセルはなく、年間を通して安定して実施することができました。学校の授業時間や式典等に合わせた時間調整、事務局スタッフによる音響対応など、それぞれの実施環境に合わせた柔軟な運営を進めたことも、公演機会の確保につながりました。

作品面では、「ガザ紛争とモハammad篇」、「ウクライナ篇」が実際の活動内容を含みながら刷新されました。また、自分自身の生き方を考える「自分との闘い篇」、東日本大震災、熊本地震、能登半島地震での支援活動を通して災害と復興を伝える「14年目の津波篇」など、新たな作品を制作しました。現在進行している世界の紛争から、災害、心のケア、個人の生き方まで、幅広いテ



御殿場実行委員会のみなさまと

マを公演に取り入れることができました。また、2026 年 1 月 15 日には「地球のステージ」が開始から 30 周年を迎え、記念の YouTube Live を配信しました。これまでの 30 年間の歩みを振り返るとともに、現在の活動や最新の内容を伝える機会となりました。さらに、3 月 24 日にはパレスチナのモハマッドの命日に合わせ、一周忌追悼ライブを配信し、モハマッドの生涯や平和への願いを多くの方々と共有しました。

一方、教育現場では予算が限られ、公演の問い合わせ時期も遅くなる傾向があります。こうした状況に対応するため、通常のコンサートステージだけでなくお話のみの講演形式を活用し、主催者の予算や時間に応じた実施方法の選択肢を広げました。また、公演料を 165,000 円から 200,000 円へ改定し、活動を継続していくための運営基盤の見直しも行いました。

30 周年という節目の年に、これまで積み重ねてきた活動を継続するとともに、新作制作、講演、オンライン配信、運営体制の工夫など、新たな形で発信する取り組みを進めることができました。今後も教育現場や社会の変化に対応しながら、世界で起きている出来事を身近な問題として捉え、一人ひとりが平和や人権、命について考える機会を提供していきます。

❖ 今後の計画 ❖

2026 年度もこれまで同様に、地球のステージ公演、お話のみの講演会を継続していきます。地球のステージ公演では、世界の出来事を中心に内容を構成していますが、講演では案内役である桑山の心療内科医、精神科医、心のケアの専門家という特性を生かして、心のケアやトラウマへの向き合い方についての内容を取り入れています。視聴した方が元気になり、前向きな行動につながるような場を、これからも提供していきます。



生徒さんとのパネルディスカッション
(神戸市立向洋中学校)



生徒さんからのお礼のことば
(つくば市立並木中学校)

地球のステージ公演を観た中学生の感想をご紹介します！

戦争の国の子どもたちはすごく強くて、優しい子達だと思いました。戦争という苦しい環境の中で、たくさん悲しい思いもさびしい思いもしただろうし、戦争がなくなる限り、ずっと続いてしまうことだと思うけど、私たちにできること、それを一人ひとりが考えて、行動するだけでも世界は変わるかもしれないと感じました。誰か 1 人の心の中だけで大勢の人が犠牲となり、関係のない人までが死んでしまったりしている。その心の中に少しでも余裕をつくる、誰かと比べたり、誰かを下げたりするのではなく、自分と戦う。過去の自分を越えるために自分の心に嘘つかず生きていけたら、他人を傷つけず、誰かが犠牲になることなく平和な世の中になると思いました。



ナンのおつかい
(アフガニスタン篇)



ロエナス
(フィリピン篇)

戦争はどこか遠い国でのことだと思っていたけれど、今回の公演で、戦争がおきている国と日本は関わり合っているし、今この瞬間も地球の中で戦争をしている国があるということがわかったので、戦争は全く他人事ではないと知ることができました。アフガニスタン、ウクライナ、ガザ地区の人々は、どの人も前を向いていて、誰かのために自分にできることをしようとしていて強いなと感じました。心の中の平和の芽を育てていくことで、このような強い心を持つ方たちが安心して生きることのできる地球にしていきたいと思いました。

国内災害復興支援事業

東日本大震災復興支援事業

❖ 事業背景 ❖

2011年3月11日に発生した東日本大震災。当時、地球のステージ事務局があった宮城県名取市は地震とその後の大津波により、壊滅的な被害に見舞われました。発災直後から、桑山のクリニックを拠点に緊急医療支援活動を実施、同年6月からは名取市内の小中学生を対象に心理社会的支援（PSS）を実施してきました。2012年3月11日には、津波で亡くなった14名の閑上中学校生のための慰霊碑を遺族会のみなさまと共に設置、社務所として、津波復興祈念資料館「閑上の記憶」を設置しました。「閑上の記憶」は一般社団法人として独立し、名取を訪れるみなさまへの案内ガイド、命の大切さを伝える拠点として活動を続けています。地球のステージでは「閑上の記憶」の活動を支えるべく、建物の支援や追悼のつどいの運営に協力しています。



閑上の記憶を支える人たち

❖ 活動内容 ❖

- ・「閑上の記憶」建物等の支援
- ・追悼のつどい運営補助
- ・館内映像、出張語り部等で使用する動画資料の制作
- ・各種イベントの広報、クルー（サポーター制度）の呼びかけ

2025年度は3月11日の追悼のつどい運営補助、館内や語り部さんが出張時に流す映像制作などを行いました。「閑上の記憶」は地域の人たちの手でしっかりと運営され、命の大切さを発信する拠点となっています。これからも「閑上の記憶」の活動をサポートしていきます。



3月11日、追悼のつどい

能登半島地震復興支援事業

❖ 事業背景 ❖

2024年1月1日、能登半島を襲った大地震と津波。その復興を支援するべく、NPO 法人グッドネーバーズ・ジャパンと事業提携を行い、石川県輪島市、七尾市で子どもたちへの心理社会的支援（PSS）を実施してきました。2025年度は七尾市の子どもたちと活動を行いました。

❖ 活動内容 ❖

- ・七尾市和倉地区の子どもたちへの PSS に対するアドバイザー業務
- ・実際の PSS ワークショップの視察、アドバイス
- ・映画制作ワークショップの監修と上映会への参加

2025年度は七尾市和倉地区の子どもたちへの PSS を実施し、その監修、アドバイスを実施してきました。

描画や粘土細工などの表現活動を通して、少しずつ自身の体験を表現すること、言葉にすることに慣れていきます。活動の終盤には映画撮影ワークショップに取り組みます。ある部分は自分の体験、別のある部分は誰かの体験、誰かの身になって表現することで共感する力を育み、自身の体験は心の引き出しへとしまわれていきます。震災から2年、爪痕の残る被災地ではありますが、子どもたちは真剣に活動に取り組み、元気を回復して이었습니다。



映画撮影ワークショップ
台本の読み合わせ

活動計算書

(単位：円)

A 経常収益

受取会費	648,000
受取寄付金	33,936,807
一般寄付金	20,798,275
パレスチナ支援	11,048,032
その他目的別寄付	2,090,500
受取助成金等	136,754,265
東ティモール事業	72,227,659
ガザ事業（JPF・UN）	29,158,026
ウガンダ事業	13,218,894
ウクライナ事業	22,149,686
事業収益	17,522,499
その他収益	3,889,630
経常収益計	192,751,201

B 経常費用

事業費	172,886,528
給与手当（事業）	54,048,706
旅費交通費（事業）	32,681,732
機材備品費	28,843,709
直接事業費（WS費）	21,995,035
諸謝金	7,371,998
事務所賃借料（事業）	6,220,344
業務委託費	5,683,798
その他事業費	16,041,206
管理費	8,039,106
人件費	5,072,301
その他経費	2,966,805
経常費用計	180,925,634
当期経常増減額	11,825,567
経常外収益	79,999
当期正味財産増減額	11,905,566
前期繰越正味財産額	30,591,952
次期繰越正味財産額	42,497,518

経常収益の内訳



総額 ¥192,751,201

■ 受取助成金等	¥136,754,265 (70.9%)
■ 受取寄付金	¥33,936,807 (17.6%)
■ 事業収益	¥17,522,499 (9.1%)
■ その他収益	¥3,889,630 (2.0%)
■ 受取会費	¥648,000 (0.3%)

2025年度 事業費の内訳



総額 ¥172,886,528

■ 給与手当	¥54,048,706 (31.3%)
■ 旅費交通費	¥32,681,732 (18.9%)
■ 機材備品費	¥28,843,709 (16.7%)
■ 直接事業費	¥21,995,035 (12.7%)
■ その他事業費	¥16,041,206 (9.3%)
■ 諸謝金	¥7,371,998 (4.3%)
■ 事務所賃借料	¥6,220,344 (3.6%)
■ 業務委託費	¥5,683,798 (3.3%)

i サマリー

- 2025年度の経常収益は¥192,751,201、経常費用は¥180,925,634となり、当期正味財産は¥11,905,566増加しました。
- 収入は助成金等が約71%、寄付金が約18%。東ティモール・ガザ・ウガンダ・ウクライナ等の事業を支える資金です。
- 支出の95.6%は事業費、管理費は4.4%。
- 寄付金は一般寄付のほか目的別支援としても温かいご支援をいただきました。
- 公認会計士による外部監査を実施しています。

貸借対照表（2026年3月31日現在）

(単位：円)

A 資産の部		B 負債の部	
流動資産	145,971,727	流動負債	115,236,138
現金・預金	144,108,075	未払金等	21,913,744
未収金	1,667,152	前受助成金	93,322,394
前払金・費用	196,500	負債合計	115,236,138
固定資産	11,761,929	C 正味財産の部	
有形固定資産	10,794,595	前期繰越正味財産	30,591,952
無形固定資産	667,334	当期正味財産増減額	11,905,566
敷金	300,000	正味財産合計	42,497,518
資産合計	157,733,656	負債及び正味財産合計	157,733,656

監査報告



阿部公認会計士事務所による外部監査

監査対象：活動計算書・貸借対照表等
監査報告日：2026年6月15日

人と関わり、人を支える 支援活動はみなさまのご寄付によって支えられています

みなさまのお気持ちによって、人々の未来を明るくする支援を届けることができます

マンスリーサポーターになる

毎月決まった金額を、ご登録のクレジットカードから
ご寄付として受け付けます
現地の人々に届く継続的な支援に役立てられます

会員になる

地球のステージの活動を
未長く支える会員組織です

単発の寄付をする

応援したい事業を選んで、ご寄付できます
ご寄付は特定の支援活動のために使われます

そのほか、遺贈や相続財産寄付などの
ご相談も受け付けています。

クレジットカードでのご寄付

地球のステージホームページ、
「寄付をする」よりお手続きできます

- ・ マンスリーサポーター
- ・ 1回のみの寄付
- ・ 会員になる

いずれのお手続きも
可能です



寄付ページへ

ゆうちょ銀行などでの払込みによるご寄付

(郵便局から) 青色の払込用紙に

口座記号番号 02260-1-87792

加入者名 地球のステージ

と記入の上、お手続きをお願いします

※ 事業指定がある場合には通信欄にご記入ください
(他銀行等から)

ゆうちょ銀行 二二九支店 当座 87792

地球のステージ 宛にお振込をお願いします

地球のステージへのご寄付は、税制優遇の対象となります



(認定) 特定非営利活動法人 地球のステージ

〒243-0436 神奈川県海老名市扇町 7-7 Tel: 046-204-9241 Fax: 046-204-9243

<https://e-stageone.org> E-mail: stageone@e-stageone.org

※ 本書の一部または全文を無断で複写・転載引用することをかたく禁じます。

2026年8月発行